

## 国際学術シンポジウム

### 現代中東における「原理主義」をめぐって

#### あいさつ

藤田 進

科研「グローバル化する世界における原理主義的思想・運動の多角的研究」の3年目を迎え、「現代中東における「原理主義」をめぐって」というタイトルにおいてシンポジウムを開催した。当初、当テーマに即してユダヤ人報告者のノートン・メズヴィンスキー氏とアラブ人報告者のアブドゥル・カリーム・バルゲーティ氏を招聘し、アラブ・イスラエル紛争の最大の現場であるユダヤ人入植地におけるユダヤ人「原理主義」とパレスチナ被占領地におけるアラブ・イスラム「原理主義」とについて報告とそれに基づく分析をお願いした。折から、現地の緊張が高まっている中でのユダヤ人・アラブ人双方の研究者の参加を得てのシンポジウムは、極めて示唆に富む内容となることが期待された。しかし、バルゲーティ氏の参加が現地政治情勢の緊迫によって急遽困難となり、シンポジウムは同氏に代わる日本人報告者の白杵陽氏と藤田進とを用意し、国内からアラブ研究者サ

ミール・ヌーハ氏にコメンテーターをお願いし、当日は酒井啓子氏の司会のもとでの開催となった。結果として、原理主義科研最終年度のシンポジウムとして、予想以上の成果を得ることができた。3年間の研究成果をもって科研当初の課題設定に十分に答えることができたのは、大いなる喜びとするところである。

(ふじた すすむ・東京外国語大学)